

【論文】

『恋する死女』翻訳をめぐるーゴージェ、ハーン、芥川

中島 淑恵

はじめに

テオフィル・ゴージェ (Théophile Gautier, 1811 - 1872) が、ハーンのアメリカにおける文筆活動の原点にあった一人であることはもっと注目されてよいだろう。事実、ラフカディオ・ハーンが出版した最初の単行本は、1882年4月、テオフィル・ゴージェの『クレオパトラの一夜とその他幻想物語 (One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances)』¹なのである。この翻訳は、表題作である「クレオパトラの一夜 (Une nuit de Cléopâtre)」のほか、「恋する死女 (La morte amoureuse)」²、「アリア・マルチェラ、ポンペイの思い出 (Arria Marcella ou Souvenir de Pompèi)」、 「ミイラの肢 (Le pied de Momie)」、 「オンファーレ、ロココの物語 (Omphale, une histoire rococo)」、 「カンドール王 (Roi Candaules)」の6篇よりなる。

ハーン自身はこれらの翻訳を、「当時自分に出来ただけの逐語訳 (literal translations, so far as I was able to make them at the time)」のようなもので、後になってみれば「間違いが沢山ある (full of faults)」が、いつか可能なら「もっと完璧な版を適切な小さな体裁で (a more perfect edition in small neat shape)」出版し直したいと希望を述べ³、決してその仕上がりに満足していたわけではないようである。ともあれ、「死女の恋」すなわち「クラリモンド」は、ハーンの思い入れの深い作品であったようである。また、ハーン自身が恥ずべき訳の間違いを多々犯しているとも言いながら、それでもゴージェの外の作品や、他のフランス文学の作品を翻訳したいという氣勢がそがれたわけではないことも語っている⁴。

また、このハーンの翻訳は、わが国でも、英語の読める読者たちの間でゴージェの名を広め、ハーンの薫陶を直接受けた上田敏はもとより、夏目漱石、谷崎潤一郎らにも愛読された。芥川龍之介は未だ東京帝国大学2年生であった1914年に、このハーンの英訳から

¹ Theophile Gautier, *One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances*, New York, R. Worthington, 1882. なお、小論の引用は同書により、以下 OCN と略し、頁数のみを示す。

² わが国では、田辺貞之助の翻訳以来「死霊の恋」という表題が定着しているが、これでは原題の意を尽くせないと思われるので、小論では「恋する死女」という表題を採用することにしたい。また、後述するように、ハーンはこの表題をヒロインの名前である「クラリモンド (Clarimonde)」に改変している。これについても賛否が分かれる点である。

³ 1886年クレビル宛の書簡 (WLH, vol. XIII, p. 373)。なお、ハーンの手紙および作品の引用は、Lafcadio Hearn, *The Writings of Lafcadio Hearn*, Boston and New York, Houghton and Mifflin Company, 1922. (以下 WLH と略す) により、巻数と頁数のみを示す。

⁴ 1883年オコーナー宛の書簡 (WLH, vol. XIII, p. 268)。

和訳した「クラリモンド」を發表している⁵。したがってこの翻訳は、ハーンの作家としての文体の確立に大きな影響を及ぼしただけではなく、わが国におけるゴージェ受容の最初期に於いて、また、幻想的な傾向を持つ芥川ら諸作家の創作に於いて看過できない影響を及ぼすことになったものと考えられる。したがってゴージェの原文とハーンの英訳、芥川の邦訳を対比しながら検討することは、さまざまな意味で興味深いのではないと思われるのである。

1. 冒頭部の比較

この物語は、カトリックの僧侶となるべく研鑽を積んできた若者が、叙階的に姿を現した謎の美女と恋に落ち、それから三年以上昼は僧侶の生活を続けながら、夜は美女と放恣の限りを尽くす、という物語である。もともとは1839年にドゼサル社から出版された、『悪魔の一涙 (*Une larme du diable*)』に収められた小品で、1845年にはシャルパンティエ社による『小話集 (*Nouvelles*)』に再録されている。ちなみに、富山大学附属図書館所蔵小泉八雲旧蔵書(ヘルン文庫)に収められている版は、1879年のシャルパンティエ社による13版であり⁶。ハーンがこの小説の訳出にあたって利用したのは、おそらくこの版であろうと思われる。

以下に、この小説の冒頭部を比較しながら、ゴージェの原文⁷とハーンの英訳、芥川の和訳をそれぞれ確認してみることにしたい(以下、下線筆者)。

ゴージェ	ハーン	芥川
------	-----	----

⁵ 初出時は、新潮文庫ゴージェ訳『クレオパトラの一夜』に久米正雄訳として収録されていた。久米は付記として、「原語の読めぬ私はやむなくラフカディオ・ヘルンの英訳を用ゐた」とし、さらに、「友人、山宮充、柳川隆之介、成瀬正一」の協力があつたことを述べている。柳川隆之介は芥川が当時名乗っていた筆名である。1921年に新潮社から出版された同書の単行本でも、久米正雄訳とされ、芥川の名前はないが、元版全集の月報第8号(1929年2月)の「編輯者のノオト」に、「クラリモンド」はすべて芥川によって訳されたものであることが記されていて、そのことを久米も了解していることを根拠として、今日では芥川訳であることが確定され、『芥川龍之介全集』に収録されている。『芥川龍之介全集』第1巻後記、岩波書店、1995年、381頁を参照のこと。なお、小論における芥川訳「クラリモンド」の引用も同書により、芥川と略し、頁数のみを示すことにする。

⁶ 『富山大学附属図書館蔵ヘルン(小泉八雲)文庫目録』富山大学附属図書館、1999年(書架番号[1464] *Gautier, Théophile, Nouvelles, Treizième edition, Paris, G. Charpentier, 1879.*)。なお、カタログではこのこの記述の冒頭に*がついており、同書が、ハーンの来日時にはアメリカに置いてきた500冊余りの本の一冊であることを物語っている。これらの本をハーンは生前に二度と手にすることはなかった。ハーンの死後係争を経て、1914年になって初めて小泉家に返還されたものだからである。ちなみに、ヘルン文庫に収められたゴージェの著作は、書架番号[1460]の『七宝螺鈿詩集 (*Emaux et camées*)』を除いて、すべて来日時にはアメリカに置いてきたものであるということになる。『七宝螺鈿詩集』はヘルン文庫にもう一冊あり(書架番号[1459])、書架番号[1460]の方が、1894年という刊行年からみても、ハーンがやはり同書を手元に置きたいと思って来日後に買いなおしたものであることが分かる。これもハーンのゴージェへの傾倒を示す証左であるといえよう。

⁷ ゴージェの原作は、*Théophile Gautier, Œuvres Complètes, Tome 6, Paris, Honoré Champion, 2017.* による。以下TGOCと略し、頁数のみを示す。

<p>Vous me demandez, frère, si j'ai aimé ; oui. – C'est une histoire <u>singulière</u> et terrible, et, quoique j'aie soixante-six ans, j'ose à peine remuer la cendre de ce souvenir. <u>Je ne veux rien vous refuser</u>, mais je ne ferais pas à <u>une âme moins éprouvée</u> un pareil récit. <u>Ce sont des événements si étranges, que je ne puis croire qu'ils me soient arrivés</u>. J'ai été pendant plus de trois ans <u>le jouet d'une illusion singulière et diabolique</u>.</p> <p>(TGOC, t. 6, p. 401)</p>	<p>Brother, you ask me if I have ever loved: yes! My story is a <u>strange</u> and terrible one; and though I am sixty-six years of age, I scarcely dare <u>even now</u> to disturb the ashes of that memory. <u>To you I can refuse nothing</u>; but I should not relate such a tale to <u>any less experienced mind</u>. <u>So strange were the circumstances of my story, that I can scarcely believe myself to have ever actually been a party to them</u>. For more than three years I remained <u>the victim of a most singular and diabolical illusion</u>.</p> <p>(OCN, p.66)</p>	<p>兄弟、君はわしが恋をした事があるかと云ふのだね、それはある。が、わしの話は、<u>妙な怖い話</u>で、わしもとつて六十六になるが、<u>今でさへ成る可く</u>、其記憶の灰を掻き廻さないやうにしてゐるのだ。<u>君には、わしは何一つ分隔わけへだてをしないが</u>、話が話だけに、わしより経験の浅い人に話しをするのは、実はどうかとも思つてゐる。<u>何しろわしの話の顛末は、余り不思議なので、わしが其事件に現在関係してゐたとは自分ながらわしにも殆ど信じる事が出来ぬ</u>。わしは三年以上、<u>最も不可思議な、そして、最も奇怪な幻惑の犠牲になつてゐたのである</u>。</p> <p>(芥川、78頁)</p>
---	---	---

こうして 3 者を並べてみると、単純にゴーティエの原文よりはハーンの英語訳の方が分量が多く、芥川の和訳ではさらに分量が増していることが分かるが、さらに細部にわたって以下に検討を施すことにしたい。

まず何よりも印象的なのは、芥川訳で一人称が「わし」になっていることである。これが平仮名二文字であるのも、全体の分量が相対的に多くなっている原因の一つであろう。また、芥川訳では二人称が「君」となっていることにも注目しておきたい。ハーン訳の一人称は当然のことながら I であり、二人称は you となっている。芥川訳で示唆されているような一人称の人物の年齢や性別は英語では明示されず、二人称にしても同じであることが分かる。また、ゴーティエの原文では、一人称は je であり、これは英語と同じくフランス語でも、一人称の人物の年齢や性別を明示するものではない。また、二人称は親称の tu ではなく、敬称の vous となっているので、芥川が採用している「君」よりは疎遠な感じ、あるいは対等以上の相手に語り掛けている感じが醸し出されている。いずれにせよ、二人称で示される対話相手については、この語りの冒頭に「兄弟よ（ゴーティエ原文 frère、ハ

ーン訳 brother)」という呼びかけがあるため、一人称と二人称の関係性はそこで明示されていると言ってよい。

ちなみに、フランス語と英語では、この時点ではこの「私」の性別は明示されていない。このすぐ後に続く一文で、「みじめな田舎の僧侶（ゴーティエ原文 *pauvre prêtre de campagne*、ハーン訳 *poor country priest*）」とあることで初めて性別が明示されるようになっている。それでは芥川がなぜ「わし」というある程度の年配の男性を思わせる一人称を採用したのか、という問題が残るが、それは、ここで引用した文中で、語り手が自分の年齢を「66 歳である」と言っていることを考えてのことであろう。もっとも、ゴーティエ原文やハーン英訳の一人称の中立性を考えれば、日本語でも中立的な「私」などの訳語を採用することも可能であったかもしれない。事実、後年の邦訳では、この小説の一人称は「私」が採用されていることが多いようである。このあたりから、青年芥川の老人観、と言うより、「66 歳の僧侶」のイメージをうかがい知ることができるかも知れない。

もう一つ注意しておくべきことがある。すなわち、ゴーティエの原文では、ここで見た箇所、書き出しが「あなたは私に問うだろう（*Vous me demandez, frère*）」となっていたり、「私はといえば田舎のみじめな僧侶で（*Moi, pauvre prêtre de campagne*）」となったりしていることから、人称が強調されていることが分かる。これは、ハーン英訳や芥川訳では反映されていない箇所である。

次に、この一節では、ゴーティエ原文で *singulière* という形容詞が 2 回使用されているが、ハーンは、最初の方では *strange*、後の方では *singular* と別の訳語を採用している。そして、それをなぞるかのようには芥川訳では、前者が「妙な」、後者が「不可思議な」となっている。すなわちハーンは、同じフランス語の単語を、機械的に同じ英語で置き換えているのではなく、文意を考えて訳し違えているのだということがよく分かる。

ハーンはまた、原文にない文言を加えたりもしている。これに続く引用箇所「私は 66 歳になるものの、ほとんど記憶の灰をかき混ぜることをどうにかようやくやりおおせている」という箇所、原文にはない *even now* という表現をここに加えているのである。これは、フランス語に比べて説明的にならざるを得ない英語の特性か、ハーンが逐語訳では原文の意を尽くせないと判断して加えたものであるかは特定できないが、注目しておくべき事項であることは確かであろう。芥川訳ではやはりハーン訳をなぞるように、「今でさへ」という語句が挿入されている。

これに続く箇所でも、ゴーティエ原文では文中の定位置に埋没している間接目的補語「あなたに（*vous*）」が、ハーン訳では *To you* と強調されるかのように文頭に置かれている。ここでも芥川訳はハーン訳を忠実になぞっていて、日本語としてはいささかぎこちない印象を与える、「君には、（句読点も含む）」という箇所が浮き彫りになっている。

次に、原文の「（私よりも）試練を経っていない魂（*une âme moins éprouvée*）」という箇所の訳出方法について見ておきたい。この箇所は、ハーン訳では *any less experienced mind* となっている。まず、原文では不定冠詞 *une* で済まされているところを、ハーン訳では *any*

を採用してさらに説明的に訳しているところが注目される。これに続く「試練を経た (éprouvé)」という過去分詞起源の形容詞は、このままでは逐語訳は難しいとハーンが判断したためか、比較級の副詞も反転させて、「より経験の浅い (less experienced)」と訳されている。これによってハーンの英訳はより説明的で平易な表現となった印象がある一方で、フランス語にはある、「宗教的試練」の意味が薄められて、世俗的な意味での「経験」の方が強調される結果になっているようにも見える。この箇所についても芥川訳では「わしより経験の浅い人」となっているので、ハーン訳を忠実に日本語に置き換えたものと言えるであろう。また、同じ箇所でも、原文でもハーン英訳でも「このような話 (un pareil récit, such a tale)」となっているところを、芥川訳では「話が話だけに」とさらに説明的に訳しているところも、日本語らしい表現を目指した芥川の配慮の賜物と言えるのかも知れない。

もう一つ注意すべきは、「魂 (âme)」の訳し方で、ハーンはこれを soul ではなく、mind と訳している。芥川訳ではこれがさらに「人」となっているので、これについては重訳による意識が、却ってフランス語原文に接近しているという恐らく偶然の効果をもたらしているものともいえる。

これに続く箇所では、強調構文となっている原文の趣をハーンが倒置構文に置き換え、原文では「出来事 (événements)」とされているところを「状況 (circumstances)」と、内容を考えて直訳ではない語を採用していること、原文にはない、「ほとんど～ない (scarcely)」という副詞が挿入されていることも確認しておきたい。そして芥川訳ではやはり、このハーン訳に忠実に和訳が行われていることが分かる。

また、主人公の「私」が、これ以降三年間にわたって、「奇妙で悪魔的な幻影の玩弄物となっていた (le jouet d'une illusion singulière et diabolique)」という箇所について、ハーン訳では、原文にはない最上級を示す副詞「最も (most)」が加えられた上に「玩弄物 (jouet)」が「犠牲 (victim)」へと直接的ではあるが、説明的で隠喩的な力は減じられた表現へと変化している。ここでも芥川訳は、ハーン訳を忠実になぞっていることが分かる。

2. 表題の問題

ハーンはこの小説を翻訳するにあたって、表題を、女主人公の名前である「クラリモンド (Clarimonde)」に改変している。芥川訳もこれを踏襲している。ところでもともこの表題は、初出時には「死女の性愛 (Les amours d'une morte)」⁸であったのが、「恋する死女 (La morte amoureuse)」の表題で広く知られるようになり、やがて 1850 年 3 月 20 日

⁸ この表題では amours が複数形であることと、「死女 (morte)」に不定冠詞が冠されていることに留意しておきたい。amours という語の複数形は、これが観念的な「恋愛」よりはより具体的な「性愛」ひいては「性行為」のことを表していることを感知しなければならない。また、「死女」に冠された不定冠詞は、これの人物が不特定な誰か、であることを示唆している。あとで改変された表題で「死女」に冠されているのが定冠詞であり、小説内で語られている特定の死美人を指すように変化していることや、さらに明示的に特定の個人を指す固有名詞「クラリモンド」となる一定の方向性に則った改変であるといえよう。

刊の『絵画雑誌 (*La Revue pittoresque*)』に再録された時には、「クラリモンド (*Clarimonde*)」という表題が採用されることとなった。

しかし、ここで留意しておくべきことが一つある。すなわち、物語の中でこの名が明かされるのは、冒頭からかなり経ってから、いささか冗長であるように思われる主人公「私」の叙階式が終わって外に出てからのことである。叙階式の最中に「私」は正体不明の美女と出会うのであるが、文中ではかなり後になるまでその名前が明かされないため、一目で主人公を虜にする美女が一層謎めいた存在として浮き上がってくる。その名前も、外に出た「私」に、「奇妙な身なりをした黒人の従僕」が近づいてきて、「隠すようにと身振りで言いながら、四隅に金の縁取りの付いた紙挟み」を手渡し、「私」はそれを僧服の袖の中にしまって、自室に戻って完全に一人になって初めて開いてみたのである。紙挟みに挟まっていたのは、2枚の紙で、そこには「クラリモンド、コンチーニ宮にて (*Clarimonde, au palais Concini*)」と書かれていた。これに続く箇所について、以下に対比させて見ておきたい。

ゴーティエ	ハーン	芥川
<p><u>J'étais alors si peu au courant des choses de la vie, que je ne connaissais pas Clarimonde, malgré sa célébrité, et que j'ignorais complètement où était situé le palais Concini. Je fis mille conjectures plus extravagantes les unes que les autres ; mais à la vérité, pourvu que je pusse la revoir, j'étais fort peu inquiet de ce qu'elle pouvait être, grande dame ou courtisane.</u></p> <p>(<i>TGOC</i>, p. 407)</p>	<p><u>So little acquainted was I at that time with the things of this world that I had never heard of Clarimonde, celebrated as she was, and I had no idea as to where the Contini Palace was situated. I hazarded a thousand conjectures, each more extravagant than the last; but, in truth, I cared little whether she were a great lady or a courtesan, so that I could but see her once more.</u></p> <p>(<i>OCN</i>, p. 78)</p>	<p>当時わしは、世間の事に疎かつたので、クラリモンドの名さへ、有名だつたのにも関わらず、耳にしたことは一度も無かつた。そして又コンチニの宮がどこにあるかと云ふ事も、一向に分からなかつた。そこでわしは何度となく推量を逞しくして見た。そして推量を重ねる度に想像は益々方外になつたが、実際、わしは唯もう一度、彼女に逢へさへするならば、彼女が貴夫人であらうと、娼婦であらうと、それは大して構ひもしなかつたのである。</p> <p>(芥川 88 頁)</p>

この箇所では、世事に疎かつた当時の「私」が、「その有名さにも関わらず、クラリモンドについて聞いたこともなく、コンチーニ宮がどこにあるのかも知らなかつた」と言う記述がある。フランス語では「～に通じている (*être au courant de*)」という熟語が用いられているところを、ハーンは「知識がある (*acquainted*)」と古風な訳語を採用した上で、原文にはない倒置構文を用いている。また、「世事 (*des choses de la vie*)」についても原文では

ごく一般的な「人生、生活」を指す *vie* とされているところを、ハーン訳ではその直訳である *life* ではなく、「現世 (*this world*)」という語を採用している。芥川訳はここでも基本的にハーン訳を忠実に日本語に移し替えている。

また、これに続く箇所でも、「クラリモンドのことは知らなかった (*je ne connaissais pas Clarimonde*)」と原文では単に「知っている (*connaître*)」という動詞が採用されているところを、ハーン訳では「クラリモンドのことを聞いたことはたえてなかった (*I had never heard of Clarimonde*)」と伝聞調の表現になっている。芥川訳はここでもやはりハーン訳をそのまま日本語に移し替えている。

「私は、それぞれにこの上なく常軌を逸した千もの推論を行なった (*Je fis mille conjectures plus extravagantes les unes que les autres*) という箇所についても、ハーン訳では、「私は、思いつくままに千もの推論を行ったが、そのそれぞれが前のものよりもより常軌を逸していたのだった (*I hazarded a thousand conjectures, each more extravagant than the last*)」と踏み込んだ訳になっていることが分かる。原文で単なる「行なった (*fit*)」という動詞が、ハーン訳では「思いつくままに選ぶ (*hazarded*)」とかなり踏み込んだ動詞が用いられている。また、ハーン訳では、それらの「推論」順番づけられているような表現であるが、原文では単純に並置されている。この箇所について芥川訳は、ハーンの英訳の単純な移し替えというよりは、和訳するにあたってさらに踏み込んで訳し違えている。日本語として自然な論理を追求したためか、原文やハーン訳と比べて、いささか長く説明的な文章になっていることが分かる。

ここで、最も重要であると思われる部分は、「私」が、再びあの美女に会えるならば、「彼女が高貴な夫人であろうが高級娼婦であろうが、実にほとんど気にならなかった (*j'étais fort peu inquiet de ce qu'elle pouvait être, grande dame ou courtisane*)」と述べている箇所の訳し方である。この箇所は、ハーン訳では原文のほぼほぼ忠実な逐語訳になっているのに対して、芥川訳では「彼女が貴夫人であらうと、娼婦であらうと、それは大して構ひもしなかつた」とされている。問題なのは、原文では *courtisane*、ハーン訳ではそのまま直訳されて *courtesan* とされている箇所が、芥川訳では「娼婦」と訳されている点である。芥川は、フランス語で *courtisane*、英語で *courtesan* と呼ばれる女性が、どのような存在であったか、という言語外事実を当時熟知していたであろうか。もしそうだとしたら、新たな訳語を創出するなど、もう少し日本語の表現に工夫を加えたのではないだろうか。

と言うのも実は、クラリモンドと言う名前は西洋世界において、ごく普通に存在する名前ではなく、どちらかといえば源氏名であることを思わせるような名前だからである。たしかにコンチーニ宮といえばイタリアの貴族の館であり、そこに住まう貴婦人が喚起されることは自明であるが、その貴婦人が正式の夫人である可能性は、言語外事実を共有する西洋の読者にとってはほとんどないと言っても過言ではなく、この名を聞いただけで、大貴族の館で囲い者になっている「高級娼婦」すなわちクルチザーヌであろうことがほぼ間違いなく感知されることは確かだからである。したがって、この名前の選択と、この名前

が物語のどこで明らかにされるか、という問題は、かなり重要なのではないと思われるのである。

3. 墓碑銘—その反響—

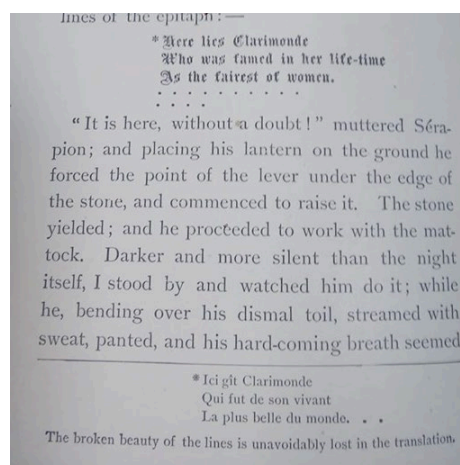
最後に、クラリモンドの正体を疑った兄弟子セラピオンと主人公が、その墓を突き止め、墓を暴いてその死骸を確認するという物語末尾に挿入された、クラリモンドの墓碑銘について確認しておきたい。以下墓碑銘の原文とハーン訳、芥川訳を示す。

ゴージェ	ハーン	芥川
Ici gît Clarimonde Qui fut de son vivant La plus belle du monde. (<i>TGOC</i> , p. 428)	Here lies Clarimonde Who was famed in her life-time As the fairest of women.* * Ici gît Clarimonde Qui fut de son vivant La plus belle du monde. The broken beauty of the lines is unavoidably lost in the translation. (<i>OCN</i> , p. 122)	女性の中の最も美しき女性 として生ける日に誉あり し、クラリモンドこそ此処 に眠れ (芥川 123・124 頁)

ここでまず原文を確認しておきたいのであるが、この墓碑銘の三行は、いずれも 6 音節よりなる韻文であることが分かる。6 音節は、言うまでもなくフランス詩法で最も美しい詩文であるとされるアレクサンドラン、すなわち 12 音節詩行の半分であり、通常のアレクサンドランにおいても半句を構成する、フランス人の耳には即座に韻文と感知される音節数である。さらに、1 行目のクラリモンドと言う名前の末尾が、3 行目の「世界 (monde)」という語と韻を踏んでいることにも注目しておきたい。ここに至って、クラリモンドと言う名は、この墓碑銘で韻を踏むために選択されたのかも知れないということがよく分かる。もちろん前半の「クラリ」は、「明るい (clair)」という形容詞由来のものであろうと思われ、「クラリモンド」と言う名前は、「世界を照らす」といったような意味合いであろうことも分かる。物語の内容に沿って考えれば、この女性によって、主人公はそれまで知らなかった世界に眼が開かれ、余人には想像もつかない体験をするのであるから、物語の内容を一言で示唆する名前であると言えるだろう。

ハーンの英訳をここで確認しておきたいが、『クレオパトラの一夜』に収録されたもので

は、右の写真のように、この墓碑銘部分が特殊な装飾文字で書かれており、欄外に、原文のフランス語も示したうえで、「翻訳では、この詩行のはかない美しさが不可避免的に失われてしまっている (The broken beauty of the lines is unavoidably lost in the translation)」と注釈が付いている。この墓碑銘にハーンが特に思い入れを持っていたこと、原文の韻文の趣を十分理解していながら、英訳でそれを移し替えるのは不可能であることを釈明している部分である。たしかにハーン訳では韻文の音節数も守られていないし、韻も踏まれていないからである。芥川訳も基本的にこのハーン訳を踏襲したのになっているが、西洋の墓碑銘と言うものについて芥川が当時どれほど理解していたかについては議論の余地があろうし、また、フランス語韻文の趣は理解すべくもなかったであろうことが伺われる。



この箇所は実は、ジェローム・ハートという人物が、ハーンに対して、別の訳、すなわち、「原文のはかない古風な趣は失わず、詩行の美しさは損なわれても韻律は守られている (The fleeting archaic flavor of the original is not entirely lost here, and the line are broken, yet metrical)」として、「ここにクラリモンド眠る。生前この女性は、この国で最も愛らしい女性であった (Here lies Clarimonde,/ Who was, what time she lived,/ The loveliest in the land.)」という訳を提案したことで知られている⁹。これに対するハーンの反論の手紙を確認することは今回できなかったが、ベンチョン・ユーが伝えているところによれば、ハーンはこの提案の初めの 2 行の完成度の高さは認めるものの、三行目については同意しかねる、なんとなれば、フランス語原文の *monde* は一国のみのことを指すのではなく、遍く世界を指すのであって、「比類なき美女」というのがこの原文の意味するところだからである、というような内容であったらしい¹⁰。

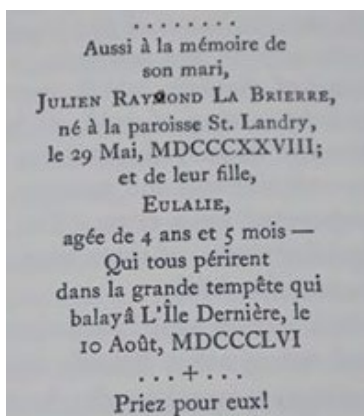
さて、ハーンがアメリカ時代の著述においても、来日後の作品においても、墓にとりわけ深い関心を示していたことはよく知られている。また、『ギリシア詞華集』に深く傾倒していたハーンにとって、墓碑銘は止みがたい好奇心をそそる対象であったことだろう。具体的にはこの後 1889 年に発表されたハーン初の中篇小説『チータ』の中で、チータの本名が明かされる部分で、墓碑銘が効果的に使われている¹¹。あとから遺体が発見された母親のアデルの遺骸の付けていた結婚指輪に、結婚の日付と「アデル+ジュリアン」という夫婦の名前があったため、この死体だけでなく、行方不明であった夫ジュリアンの死亡も確

⁹ このことはハーンの手簡集を刊行したエリザベス・ビスランドがその冒頭で解説を行っている。WLH, vol. 13, pp. 75-76.を参照のこと。

¹⁰ Bengchon Yu, *An Ape of Gods, The Art and Thought of Lafcadio Hearn*, Detroit, Wayne State University Press, 1964, p. 9.

¹¹ WLH, vol. IV, p. 206.

認されたことになり、また身元不明遺体であった幼女が、両者の娘ユーラリである、と結論付けられることになり、三者の名を刻んだ墓碑銘のもと、サン・ルイの墓地に葬られることになる。小説に挿入されているのは、左の写真のように、遺体の発見されたアデルの



ものではなく、それに続く形でのジュリアンとユーラリの墓碑銘である。この箇所は、本物の墓碑銘のように、センタリングを施した分かち書きで、しかもフランス語で挿入されている。こうして見てくると、この墓碑銘の挿入が、ニューオリンズ等の墓散策の賜物であると同時に「クラリモンド」のそれに着想を得たのであろうという推論もまた成り立つのではないと思われるのである。

4. おわりに代えて

こうして見てくると、ハーンが自らの訳業を「逐語的 (literal)」と言っているのは、ゴージェエのフランス語原文を必ずしも忠実に英語に敷き写すということではないということがよく分かる。また、原文と訳文を詳細に比較検討してみると、ある訳語の採用や構文の改変、原文にない語の挿入なども、原文をよく吟味したうえで行なっていることが浮かび上がってくる。ハーンがこのような翻訳作業によって自らの文体を確立していったのであろうことは想像にかたくない。さらには、ある種の語彙の頻繁な使用や構文など、後のハーン作品と比較分析することによって、このような翻訳を通じた文体練習がどのように結実しているかを探るのもまた興味深い作業であろう。また、芥川に関していえば、未だ近代日本語の揺籃期にあつて、ハーン英訳の敷き写しとはいえ、翻訳を通して文体練習を行っていたことはここに見るように明らかである。そこから得られたものが後の作品にどのように反映されているかについては、今後の例証を俟たれたい。